

# キク栽培を通じて人々と植物のかかわりについて学ぶ

作成者：長野県岡谷市三沢区民農園 林 弘旦

長野県岡谷市立川岸小学校 教諭 井出 竜也

## ■ 実施主体

名称：長野県岡谷市三沢区民農園  
長野県岡谷市立川岸小学校  
担当窓口：岡谷市三沢区民農園 林 弘旦  
川岸小学校担当教諭 井出 竜也  
所在地：長野県岡谷市川岸



秋に学校の玄関前を飾るキク

## ■ 取組地域 長野県岡谷市川岸地区

## ■ 概要

(平成28年度を中心として)

- ・岡谷市川岸地区の川岸小学校では、6年生全員が一人一鉢のキクづくりを行う伝統が根付いている。
- ・平成28年度も総合的な学習の時間の教科として取り上げ、2クラス66人が全員で栽培活動を行った。
- ・毎年、校内の正門付近で栽培をしているので、キクの栽培イメージは抱いているものの自分たちの手で育てるのは初めてであった。
- ・6月から11月までの半年間は、休日、修学旅行、夏休みなどキクの栽培から目を離すことも多かったが、天候の変化なども気にしながら管理を行い、秋にキクの花が咲きそろった時には全員が感動した。
- ・校内美化のほか、全校児童、来訪する保護者、来客など多くの人に活動の様子を実感してもらえた。

## ■ 取組開始時期・経緯

- ・当校においては伝統のあるキクづくりと伝えられるがいつ頃から始まったのかを知るため各年代層の卒業生に聞き取った結果、40年くらい前から始まったと推定された。
- ・平成28年度は6月上旬に、毎年苗の提供をうけているキク愛好家からポット苗を入手し、それとともに今年の品種の特性や栽培のポイントなどについて助言をうけ、6月下旬に全員による鉢上げ作業から今年の栽培がはじまった。

## ■ 目的（目標）

- ・栽培や手入れが難しいといわれる「キク」を栽培することを通して、命あるものを育てる難しさを知り、植物が育つ環境条件を調整する技術を学ぶ。
- ・川岸小学校6年生が毎年取り組んでいる「キクづくり」の伝統を継承する。
- ・キクの立場に立って世話をすることを通じて、相手への思いやりの意識をもった花づくりを体験する。
- ・これらの取り組みを通して豊かな人間性を育む。
- ・他の学年を含め、全校をあげて進めている「花による校内美化」に率先して取り組む。

## 【取り組み内容】

- 対象者・人数：小学校6年生 2クラス66名
- 教科：総合的な学習の時間
- 所要時間：授業10時間の他  
早朝や休み時間および休日などの授業外時間に随時
- 対象場所：小学校
- 指導者：指導者1名、アシスタント・クラス担任教師2名



作業の説明

### ■ 資材・花材

- ・キク苗 90本程度（予備苗を含む）
- ・移植用鉢 5号鉢（鉢の内径15cm）90個
- ・定植用鉢 7号鉢90個
- ・鉢皿 90個
- ・キク用培養土（市販品）400㍓
- ・赤玉土（中粒）15㍓
- ・肥料
- ・市販の油粕系の固形肥料 10kg
- ・液肥（2種類） 2㍓
- ・成長調整剤（ビーナイン）
- ・殺虫剤（スプレー型） 5本
- ・支柱 270本
- ・ビニールタイ 1350本
- ・支柱の固定具 90個
- ・輪台 270個
- ・名札 66枚



はじめての作業開始

### ■ 活動内容（指導内容）

- ・栽培に関わる指導は地域内に居住し区民農園活動や園芸福祉活動などを行っている林が担当した。
- ・企画運営は担任教師と各クラスの「キクづくり委員」が担当した。
- ・年度当初に、キクづくりを進めるに当たっての目標や心構えなどを担任と確認し、共通の認識を持って指導した。



ポイント説明

## キクづくりにあたっての心構え

- ①キクは植物であり生きていること。
- ②人間がごはんを食べるようにキクは葉っぱで栄養を作り、根から水を吸収し成長すること。
- ③栽培管理は常にキクに話しかけるように観察や世話をすると、秋には大きく立派な花が咲くこと。

## 活動内容

- ・品種選びと挿し芽の育成は近隣の栽培者に委託し、6月中旬にポット苗として確保した。

- ・仕立て方は大ギク3本に仕立てる「ダルマづくり」とし、学校にあるキクの栽培マニュアルにしたがって5号鉢移植、7号鉢定植で進めた。
- ・栽培は一人一鉢で、所有者を明確にして栽培することとした。
- ・鉢替えなどの作業は全員で行うこととし、生育の状態と授業計画などを見ながら日程を設定した。
- ・水やりや支柱立てなどの日常管理は、授業時間外に児童が個人ごとに進めた。
- ・指導者は時々生育の様子を確認に訪れたが、鉢の置き場所や置き方など以外、個々の鉢には手を加えないよう留意した。
- ・指導者の管理する鉢を参考として近くに置いた。
- ・栽培場所は玄関付近で皆の目につきやすく、しかも生育に好適な位置を選んだ。

## 1. 移植(1回目) ～ポット苗から5号鉢へ～ (6月下旬)

- ・ポットに植えてある苗を、5号鉢に移植した。
- ・排水性を考え、鉢底に網を敷き、赤玉土を適量入れ、その上にキク用の培養土を入れ移植した。
- ・作業にあたってはポットの土をなるべく崩さないように丁寧に行い、鉢の中央部に適度な深さに落ち着くように留意した。
- ・最後に固形肥料3個を土に押し込んだ。
- ・根付くまでは、しおれやすいのでこまめな水やりをしながら様子を観察した。
- ・茎の長さが10センチくらいに成長したころ、わき芽を発生させるため、端部を軽く摘む作業をしたが、鉢によっては生育の差があるので時期をみて個々に行った。



丁寧な作業を



ていねいな作業を

## 2. 移植2回目(定植) ～5号鉢から7号鉢へ～ (7月下旬)

- ・5号鉢に移植して一か月くらい経過した夏休み直前の7月下旬に一斉作業として定植を実施した。
- ・植え替え用の7号鉢の底部には網を敷き、赤玉土を入れて排水対策をしてから下部に培養土を入れた。
- ・下部に入れる培養土の量がポイントであるので、今までの鉢を仮置きしながら決めた。このときに下層部の根に与える固形肥料を置いた。
- ・植え替え作業にあたっては根鉢がくずれて根が傷まないように細心の注意をしながら、新しい鉢の中央に、支柱を固定する鉢の穴の方向に枝が向くように植えた。
- ・植え替え後の地表面が鉢の縁から数センチ下になり、灌水したときに水がたまる部分がとれることをポイントとした。



仲間とも協力しながら

- ・ 植え替え後は株元がぐらつかないように割り箸などで支えるなどの工夫を提案した。

### 3. 夏休み中の管理

- ・ この時期はキクにとっても過酷な環境となるので気象変化と生育状況を気にしながら水切れや、肥料切れなど手遅れにならないような管理をすることに心掛けた。
- ・ 休み中にも時々登校して様子を確認することが求められ、多くの児童はこのことを心掛けたが、時には水切れで萎れる鉢もみられた。
- ・ 友達の鉢の様子にも気遣う児童もみられた。
- ・ 担当の教職員や指導担当者もこの時期は時々様子を見て、必要な水やりを補助した。
- ・ 7月下旬から夏休み明けころまでは週一回、液肥をあたえることも指示したが、専用の液肥の取り寄せや夏休み中ということもあり、十分に行えないことがあった。8月10日より9月の中旬までは週一回液肥をあたえたえる指導をした。



枝の仕立て方説明

### 4. 夏休み明けの管理

- ・ 2学期に入り、登校した児童は夏休み中にも時々自分の鉢を観察していたので大きな変化は感ずることなく継続した管理をすすめた。
- ・ 高温時期を経過した鉢は生育の差が目立つようになり、中には枯れそうに衰弱したものもみられた。これらは予備のものと入れ替えるとともに、「水や液肥をあたえていても衰弱したのはなぜか…？」などという該当児童の悩みに対する答えを教え、教材として活かすように心掛けた。



つぼみの決め方が大切

### 5. 9月の管理

- ・ 伸び始めた枝が3本の支柱に達したのからビニールタイなどで誘引した。
- ・ 枝の揃いや伸ばす方向をみながら予備の枝を含めての慎重な作業ではあったが枝元が裂けるなどの失敗もみられた。そんな時、自分の指の傷でも治療するかのようにテープなどで補修する光景もあった。
- ・ 3本の側枝が決まってからも1本程度の予備枝を残しながら支柱への仮止めをした。仮止めとしたのは、開花時に茎の長さに見合った支柱に付けかえる必要があったためであったが、児童によっては念入りにビニタイを何度も巻き付ける例も多く、意欲の一端と感じられた。
- ・ 側枝のわき芽摘み作業を各自おこなった。

8月下旬ころ側枝の先端に花芽が形成されると、葉のわきに新芽がのび始める。花芽は目には見えないので、このころの状態はなるべく説明するようにし、作業目的の理解につとめた。

- ・9月の上～中旬になると茎の先端部に複数のつぼみが見え始める。

この時期に一つのつぼみを残して早めに摘み取る。この作業は毎年ベテランでも迷うほどの重要さがある。完全なつぼみなのか、葉を含む不完全なもの（ヤナギ芽）なのかの判断で、この際は指導者が手助けした。

## 6. 10月の管理

- ・つぼみが大きくなり茎の伸びが止まったころ3本の支柱の付け替えや茎の固定作業をした。
- ・途中で茎を欠損した場合などの2本仕立てや、児童の希望による4～5本仕立ても可とした。
- ・花卉が伸びだしたころ輪台をつけた。支柱と茎、茎と輪台をそれぞれビニールタイで固定するが、熟練を要する作業であるので手助けした。
- ・花がまっすぐ上を向いて咲くために時々鉢の方向を変えることや隣の鉢との間隔についても適宜支援した。

- ・10月下旬になり、見ごろになった花は校内音楽会の開催にあわせて会場入り口に展示して来賓や保護者の方を出迎えた。また、常時児童玄関の入り口に展示して登下校時に見てもらえるようにした。



児童の玄関も飾った



これも自慢の出来ばえ

## 7. 片付け(12月中旬)

- ・花の咲き終わりにあわせて鉢からキクを取り出して上部を切り片付けをした。キクの根元にはすでに来年の春にのびる芽が成長していることを観察し、命をつなぐ準備をして冬を迎えていることを学習した。
- ・その株を大切に家に持ち帰る児童もいた。

### ■ 児童に関心を持ってもらえるように工夫している点

- ・キクの栽培をはじめるとの心構えとして、キクも自分たちと同じように生きている植物であるので、いつもキクの立場にたって世話をすることが大切であることを意識づけた。
- ・わからないことがあったらいつでもキクに詳しい専門家に電話などで質問や相談をするように助言した。

- ・病虫害などの葉の異常現象（例：絵描き虫とも呼ばれるハモグリバエによる、葉の表面にみられる白い曲線）を見つけての質問には、丁寧に説明した。
- ・下葉などに変色が見られたとき、著しいものは見ばえが悪いので除去したくなるが、そのままにして観察を続けながら原因を考えるようにした。
- ・クラスごとにキクづくり委員をおき、委員を中心に活動を進めた。
- ・指導者からのアドバイスは担任教師からキクづくり委員を通して児童に伝え、手遅れにならないように対応した、できる限り学校へ出かけて気づいたことを担任教師に伝えた。
- ・児童からの質問は、キクづくり委員に報告があがり、担任教師を通して指導者へ連絡があり、わかりやすく回答することを心掛けた。
- ・図画工作では「キクと私」を題材に絵を描いて、開花した花を記録に残した。
- ・児童の目が届きやすい児童玄関前で菊を栽培するようにした。
- ・花を分解して構造を見せたり、なぜ秋に咲くのかななどの不思議な生理生態など説明しようと試みたが少し難しかったかもしれない。
- ・登下校の道端にもキクの仲間がいろいろと見られるという点に関しては興味を示した。



今年度は、絵画で表現した



観察記録集を作成した  
こともあった



過去には、キクを題材に  
版画集も作成した

## ■ 経費

- ・前記した諸資材の経費は一人あたり約600円であった。
- ・キクのポット苗は、近隣の愛好家から例年どおり学校の児童が栽培することに快諾が得られ、格安に提供をうけた。
- ・ポットや支柱のほか、前年までに使用したものを再利用するなど心掛けた。

## ■ これまでの成果（花育を実施したことでどのような効果があったか）

- ・育てていくにつれて、興味や愛着が生まれ、キクに触れたり観察したりする時間が増えた。
- ・葉の色が淡くなったり、アブラムシが付いたり、次第に少しの変化にも敏感になり、児童が自主的に殺虫剤をもらいに来たり培養液を施す姿がみられた。

- ・観察日記に、「花を育てていくうちに、花が咲くのが楽しみになった…!」という記述が見られた。  
この日記を書いた児童は風邪で3日間休んだ後の登校日に「キクの葉が萎れて来ている!」と水をやり、それからは児童玄関を通るたびに菊の様子を観察していた。
- ・予備で育てていた20鉢近くのキクにも積極的に水やりをしたり移植作業に取り組んだりする姿が見られるようになり、愛着がわいている様子がうかがえた。

#### ■参加者からの感想（児童、保護者）

- ・植え方のコツを教えてもらい、上手に植えることができました。今日から、自分たちがこのキクを育てるので、水やりを忘れずにやって、きれいな花が咲くようにしっかり育てていきたいです。  
(児童の日記より)
- ・最初、育て始めた時は、丈夫に大きく育つかすごく不安でした。だけど林さんから話をたくさん聞いたり、作業をしたりしていったら、花がさくのがすごく楽しみになりました。  
(児童の作文より)
- ・今日は、キクの片付けをしました。6月から育て始め、枯れるまで大切に育ててきました。最後の片付けまでしっかりできました。茎の根元に、新しい芽が出ていたので、家でお母さんと相談して育てたいです。新しい芽も、今回教わったように、水やりをしっかりして大切に育てたいです。  
(児童の日記より)
- ・植物も新しい芽に命を託し、つないでいることや、暖かくなるまで根元でじっと待っていることを新たに知ることができました。  
(児童の日記より)
- ・「キクのお礼の会」がありました。キクづくりを通して、枯れ始めた葉は切り捨ててしまいがちだけど、必要なものなんだということが分かったし、林さんへ、一年間の感謝の気持ち伝えることができたのでよかったです。  
(児童の日記より)



講師へのお礼の手紙

## ■ 今後の課題やその改善方法

### 【指導者の立場から】

- ・ 当校において長い伝統があるといわれる「キクづくり」に今後どのようにかかわっていくべきなのか？
- ・ 各種の園芸植物の中でキクを学校の教材としてとりあげる意義は
  - ① 昔から多くの人々に親しまれる「和花」の代表種である。
  - ② 栽培期間が長く、季節の変化とともに変わってゆく生育の姿が観察できる。
  - ③ 学校などの装飾環境にあう。
 等々あるが「伝統が負担になってはいないか？」と気になる。
- ・ 全員での授業のとき、時間の制約などから児童からの疑問などに十分フォローできたか気になる。
- ・ 指導者も高齢化しているので、学校教育におけるキクづくりについて対応可能な指導者の計画的な確保が必要である。
- ・ 授業時間外での自主活動であれば指導者としての対応は可能である。

### 【学校の立場から】

- ・ 教職員は異動や担当の学年があるので、職員の中で本校におけるキクづくりの経緯やキクの栽培等について詳細を引き継いでいくことが難しい場面もある。担当の職員になった者が困らずできるようにしていく必要がある。
- ・ 学校での授業だと、学習をスタートするにあたって、「伝統だから」取り組む傾向がある。もちろん、その理由もあるが、子どもたちを誘い込み、本気にさせるには、それでは弱い。今年度はその反省から「人々と植物のかかわり」に焦点をあて、1シーズンの活動に取り組んだ。指導する立場の職員が何を大事にし、子どもたちに何を学ばせたいか、願いを持って取り組むことが、ただ活動で終わらせないために大事になる。
- ・ 夏休み中の管理が難しい。殺虫剤や液肥は薬剤なので、夏休み中は担任が液肥をやったり害虫駆除した。また、キクの水やり当番を決めたが、担任もキクの観察をしながら気温が高い日などに水やり等の補助をした。
- ・ キクの生育状況に個体差があるため、どのタイミングで指導者に次の作業を教えてもらえばよいか判断に迷った。相談して日程を決めたが、全員が同じ作業を行うことができず、後日改めて作業することになった児童もいた。
- ・ 専科の授業や行事の都合で、指導者に教えていただくにも十分な時間が確保できない。特に、花芽の選定や輪台の設置などには時間をかけて丁寧に行えるようにしたい。